

大河ドラマの曲とは…

市長：ところで、昨年の対談では、「篤姫」の脚本を担当され、また「江」姫たちの戦国」の原作者である田淵久美子さんをお迎えしました。その時、「篤姫」同様、江」姫たちの戦国」の音楽も吉侯さんしかない」とおっしゃっていました。

吉侯：そうですね。実は、篤姫が終わったときに「もう大河ドラマはやらない」と宣言したんです。1年間向き合うわけですし、とにかく大変なんです。それでも江を引き受けたのは、田淵さんやスタッフの皆さんの熱意におされたからです。やっぱり大変でした。

大ヒットした篤姫のイメージはどうしても残っていますから、それに続く曲となると容易ではありません。

加えて、大河ドラマは県や市を挙げての一大イベントです。期待も大きいです。今、大河ドラマが終わり、「江の曲、良かったね」と言ってもらえて、ほっとしています。やはり、引き受けて良かったと心から思っています。



市長：なるほど。今、吉侯さんの覚悟というか思いをお聞きして、あの時、田淵さんが吉侯

さんにこだわられた理由がわかる気がします。実は、私もCD持っているんですよ。22曲あるんですね。

吉侯：CDに収録されているのはほんの一部で、今回はバージョン違いなども含めると81曲つくりました。ちなみに「篤姫」のときは70曲でした。

市長：そんなにたくさん作られたんですか。ドラマの場面にあわせて、数々の曲が流れていますが、その中で、最も親しみのあるのはメインテーマですね。博覧会場でも常にかかっていますから。このテーマ曲にかけた想いをお聞かせいただけますか。

吉侯：江という人間の生き様を2分45秒の中で表現できたことの想いで作った曲です。1年経った後に、曲を聞いて、シーンが浮かんでくれば最高です。メインテーマを作るに当たって、竹生島に2回訪れました。僕が行った時には、波一つない穏やかな湖面に、舟が一艘浮かんでいたんです。神秘的に感じましたね。そのまっ平らな水面に一つの滴が落ち、そこから波紋が広がる。そんなイメージでできたのが、この曲の冒頭のピアノのメロディーです。竹生島に

行かなければできなかったかも知れませんね。



▲幻想的な竹生島

音楽家への道

市長：長浜の景色が影響しているんですね。それを聞いてますます親しみが沸きました。

ところで、吉侯さんはいつごろから音楽家になろうと思われたんですか。

吉侯：それが、音楽家をめざしていたわけではないんです。大学時代にアルバイトでピアノを弾いていました。そしたらいつの間にかプロに誘われて…。でも僕、実は公務員になりたかったんです。(笑)

市長：公務員ですか…。それは意外です。吉侯さんが公務員になつていたら、これらの名曲を聞くことができなかつたわけ

すから、音楽家になつていただいてありがとうございます。

音楽の魅力

市長：吉侯さんの曲は、心に染み入りますね。

吉侯：今回、作った曲の中に「音涯(ねがい)」という曲があるんです。これは、戦に出た男の帰りをじつと待つことしかできない戦国の女の心を思い描いた祈りの曲です。東日本大震災のチャリティーコンサートでこの曲を聞いていただいたのですが、演奏しながら涙を流す自分がいきました。曲を弾き終えた後、被災者の一人がこう言ってくれたんです。「今日のピアノを聞いたのを境に前向きに生きていきます」と。自分にも音楽家としてできることがあるのだと感じた瞬間でした。

市長：それは音楽家である吉侯さんだからできた支援ですね。千年に一度と言われる大震災からの復興は容易ではありません。それぞれが、それぞれの力で支援を続けることが大事だと思います。市でも、被災地の日でも早い復興を願い、市民の皆さんと共にできることをしたいと思っています。



▲美しいメロディーを奏でる吉侯さん

市長：こういった心に響く曲をつくるには、やはり繊細な心が必要なんですよね。

吉侯：そうでもないですよ。どちらかと言えば大きっぱです。曲を作る時に気をつけていることと言えば、オンとオフの切り替えです。常に作曲の事ばかり考えていると息が詰まるんです。だから、曲を書こうと思つたらスイッチオン、出来なかつたらすぐにオフ。それが今のスタイルです。最初から出来たわけではないですが…。

可能性を秘めた子ども達へ…

市長：博覧会のフィナーレイベントとして、吉侯さん指揮のもと地元3つの中学校の生徒が

江のメインテーマを演奏します。子ども達にとってすごく貴重な体験となると思います。

吉侯：僕もうれしいですね。自分の書いた曲を子ども達が一所懸命演奏してくれる。大河ドラマがなければこんなこともなかったかもしれない。実は、先ほどリハーサルをしたのですが、この江のメインテーマは難しいんですよ。それを見事に演奏してくれました。作曲家冥利に尽きるというのはこのことですね。



▲吉侯さんの指揮で、見事な演奏を披露する子どもたち

市長：吉侯さんとの共演をきっかけに、将来、吉侯さんのような音楽家になりたいという子どもが出てくるかもしれません。夢をかなえるためにアドバイスがあれば。

吉侯：音楽大学も出ていない僕が、大河ドラマの音楽を作曲するまでになつた。僕がそうだったように、誰がどうなるかなんてわかりません。「私じゃ無理」と自分の可能性を否定しないで

ほしいと思います。

そして、もうひとつ。夢を口に出して多くの人に伝えてください。とにかく馬鹿にされてもいいから、「自分はこうなりたい」と。誰かにその思いが伝わると夢が連鎖し、必ず何かが起こります。僕はそうやって生きてきました。夢や目標は、手が届きそうで届かない身近なものがいいですね。例えば、まずは滋賀県一のピアニスト、その次は、日本一、そしていつか世界一！という具合に。

市長：夢の話、ぜひとも長浜の子ども達に伝えていきたいと思えます。子どもたちは無限の可能性を秘めており、少しのきっかけで未来が大きく変わります。吉侯さんと一緒に、その経験は、子ども達の一生の財産になるでしょう。子ども達が、夢に向かってのびのびと育つ環境をつくること。それが私達、大人の仕事だと改めて感じました。今日はありがとうございます。

